

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720419

研究課題名(和文) 土族系門中の全体像理解のための現代民俗学的研究

研究課題名(英文) Folklore study for comprehensive understanding of Munchuu that Ryukyu Kingdom officers and their descendant groups on Okinawa of today

研究代表者

武井 基晃 (TAKEI, Motoaki)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：00566359

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、琉球王府時代の土族およびその子孫の門中についての今日的な成果(1～4)と、歴史的な成果(5～7)に分けられる。

(1)土族系門中の全体像の理解(久米系門中の現在、屋取の門中の現在)、(2)門中団体による資料刊行の事業、(3)門中団体と法人制度の改正、(4)孔子廟移転の調査。

(5)大正時代の『沖縄県「註記調書」集』活用の促進、(6)琉球時代の「家譜」の読解、(7)近世の琉球通事による英・仏への対応の研究。

研究成果の概要(英文)：The results of this study for Ryukyu Kingdom officers and their descendant groups called in Munchuu are divided into contemporary outcomes(1-4), and historic outcomes(5-7).

(1) Comprehensive understanding of Munchuu of today, (2) Study for publication project by descendant groups, (3) Analysis on the revision of the corporate juridical person and Munchuu, (4) Fieldwork on the moving of the Confucius Temple on Naha.

And (5) Promotion of the use of the documentations of map creation in the Taisho era, (6) Analysis of the genealogical records in the Ryukyu era, (7) Historical research on cases of reception to the UK and France by the diplomats of Ryukyu Kingdom.

研究分野：民俗学

キーワード：門中 法人制度 祖先祭祀 孔子廟 子孫への成果公開 現代民俗学 沖縄 琉球史

1. 研究開始当初の背景

(1) 土族系門中研究の遅れ

現在まで続く沖縄の土族系門中は、琉球王府時代に土身分の固定と家譜の管理とを一体で行う政策に由来する。今でも毎年家譜の内容の確認を含めた祖先祭祀が行われており、現代人と歴史の関わりを知るために最適な研究対象である。

にもかかわらず、沖縄の門中研究は十分に進んでいると思われがちだが実はそうではなかった。

特に、近世由来の土族の門中が「現在までいかに続いてきたか」は長らく課題のままであった。研究が進まなかった原因として日本復帰直後から、都市部にいる土族の門中の成員を把握することの困難さ、戦争による家譜の焼失、焼失をまぬがれた家譜も門中内部で保管され外部に出されなかったことが指摘されてきた[比嘉 1979]。

(2) 門中団体と今日的な新局面

多くの戦死者を出した大戦後の門中意識や系図作りの意欲が高まった時期を経て、都市化・後継者不足・情報化によって今日、門中の伝承行為は様々な新しい局面を迎えている。

その1つが、民法の法人制度の改正である。父系的血縁集団で、共有財産の管理や祖先祭祀行事の執行を主目的とする門中のいくつかは、すでに「公益法人」や「権利能力なき社団」となっていたが、再度団体としての社会的な位置づけを自己主張し、申請し直すことが求められた。

久米系門中の連合体的な団体である「久米崇聖会」には、同時進行で3つの新局面が迫っていた。1つは既述の法人制度改正(2013年11月申請締切)、2つは戦中の壊滅から別の地区(那覇市若狭)に移っていた久米孔子廟が元々の地区(那覇市久米)に移転する事業(2013年)、3つは久米崇聖会の設立100周年(2014年)事業である。琉球～沖縄史の体現者の団体にとっての新局面・転換点として、それらの事業の追跡も求められた。

2. 研究の目的

以上の背景をふまえ、本研究の目的は大きく分けて、(1)今日の門中の活動実態の分析、および(2)新局面に対応する門中団体の分析の2つである。いずれの門中も近年「積極的に自分たちの歴史を確認」を行っており、本研究から人々の歴史や由緒への言及、歴史意識がどのように変化したかについて、またその変化に最近の歴史認識や価値観がいかに影響したかについて新知見を得ることを目論んだ。

(1) 今日の門中の活動実態の分析

本研究では、沖縄の門中の全体像の理解と

現状把握の進展を目指し、祖先祭祀および歴史認識という問題を併存させた課題をふまえ、土族系門中の中でも主流とされる「首里系」だけでなく、「久米系」の門中、さらに帰農した「屋取」集落の門中を研究対象とした。

それは沖縄の門中の歴史的・民俗学的研究における偏りの補完を目指すことにもつながる。調査対象の門中については、今日の門中祭祀の実態、始祖・祖先についての由来伝承、および門中所蔵の家譜資料や位牌の読解を進めることを試みた。

(2) 新局面に対応する門中団体の分析

門中団体と法人制度改正： 研究期間中に進化した法人制度の改正(年表1)は、沖縄の現代社会における団体としての在り方を門中に問い直すものであった。人々の生活に法制度の改正がいかに影響するのかという実地的な問いが見出された。

1896(M29)年	民法制定。従来の「公益法人(社団・財団)」の成立
2008(H20)年 12月1日	「公益法人」制度改正への移行期間開始
2013(H25)年 11月30日	移行期間締切 公益(社団・財団)法人 or 一般(社団・財団)法人

[年表1 法人制度の改正]

具体的には、社会に対する公益事業を主張して公益社団法人となるか、あくまで門中として法人格の取得のみを目指し一般社団法人となるかの2つの選択肢を門中団体は検討した。これらの選択肢をめぐって、それぞれの門中ごとに、これまで/これからの活動と存在意義をふまえてどのように結論づけられたかを追跡することを目的とした。

孔子廟の移転(遷座式)： 同じく研究期間中に進化した孔子廟の移転事業は、その管理団体である久米崇聖会の設立100周年とも合わせて、琉球～沖縄史の新局面だった。その事業がいかに実現し、実際に遷座式の行事がどのように執り行われたか、移転前最後の釋奠(孔子祭)と移転後最初の釋奠をともに記録し、「孔子廟の引っ越し」という世界的にも稀な事態を分析することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 継続的な現地調査

目的(1)の今日の門中の活動実態の分析のため、研究期間中に継続的な行事の調査を実施した。主に、4月5日の清明節(沖縄本島における墓参りのシーズン)に門中の墓参りの調査、旧暦5月15日の五月ウマチー・旧暦6月15日の六月ウマチーの現地調査、旧暦7月～8月頃の大綱引きの調査(中城村、南風原町など)、9月28日の孔子廟での釋奠(孔子祭)の調査で、これに加えて2013年6月には孔子廟移転(遷廟)の調査を行った。

(2)史資料の分析

1. 史資料自体のモノとして特徴を明らかに
 2. その史資料に書かれている内容・得られる知識や情報を明らかに
 3. 今日の人々がその史資料を参照する行動を明らかに
- 書き残されたことを、書かれた当時を知る資料として用いるだけでなく、それが今日いかに受容され活用されているかを重視。人々はなぜ書き残すのか、そしてそれをどう読み返すのかという課題

[本研究での史資料の分析の基本方針]

門中「家譜」資料： 収集した家譜の読解を進めた。特に、各門中が所持している、琉球時代に漢文で書かれた家譜を対象とした。また、その読解成果を当該の門中の団体に提供し、その受容のされ方も検証した。

国土地理院蔵「註記調書」： 加えて、沖縄県における集落研究の基礎資料となる「註記調書」(国土地理院蔵。大正時代に陸軍陸地測量部が沖縄県の地図を作成した際の基礎調査台帳)の分析を通して、近代～戦前の沖縄県の各集落の原型についての情報をまとめた。

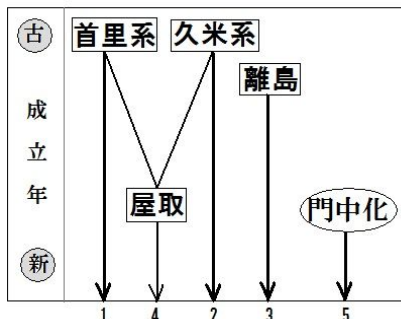
4. 研究成果

本研究の成果は、琉球士族という存在について、その子孫の現状という今日的な成果(1, 4, 5, 6)と、歴史的な成果(2, 3, 7)に分けられ、それぞれが密接に補い合う関係にある。

(1)士族系門中の全体像の理解

現在見られる門中を大まかに分類すると、1. 大多数を占める「首里系」の士族の門中 / 2. 通訳・外交官を輩出した「久米系」の士族の門中 / 3. 「離島」の士族格の門中 / 4. 1~2 が近代期に都市部から農村部に帰農した「屋取(ヤードウイ)」の門中 / 5. 農村部で近代期に1の制度を模倣して成立した民間の門中の5つに分類できる(図1)。

しかし、研究が進んでいる分野は、歴史学による家譜の収集と読解(1と2, 3の一部)[田名2000]や、民俗学・人類学による農村社会への門中制度の導入、すなわち「門中化」と呼ばれる5の過程の検証に集中していた。



[図1 今日見られる沖縄の門中]

そこで本研究では、次の門中とその子孫を重点的に追跡調査し、下記のことを明らかにした。

久米系門中の現在(図1の2)： 久米系門中とは、王府時代に久米村(現・那覇市久米)に集住し、代々通訳など外交担当を輩出し続けた家々の総称で、久米村人(クニンダンチュ)とも称する。琉球王府終焉後も、戦中を経て今日に至るまで、久米崇聖会・久米同進会等の団体を組織し門中を越えて連携している点が、首里系門中とは大きく異なる。中でも久米崇聖会が毎年9月に那覇の孔子廟で共催する釋奠(孔子祭)は、近世の琉装を近年に復活させたなど、彼ら自身が伝統的な存在であり、首里・那覇の歴史の中でも特別な立場を果たしてきたことを強調している。こうした久米系の子孫の団体や孔子廟の動向を追跡することを目的として掲げた。

このほか、個々の門中ごとに執り行われる、清明祭・ウマチーなどの祖先祭祀行事、毎年3月の学事奨励会などの門中成員の若者に琉球時代の祖先のルーツを確認させる機会といった活動も重視した。

屋取の門中の現在(図1の4)： 屋取集落の門中は首里・那覇から農村に移住した士族の子孫だが、毎年の清明祭やウマチーには系譜関係をたどって宗家の墓・位牌・家を拝んでいる。今日も続く、屋取の門中と門中宗家との交流について包括的に論じた研究はほとんどないためその実態を調査した。

従来、那覇などの都市部に住む門中宗家の個人宅を見つけ出すことが困難とされてきたが、実は農村部に移住している士族の門中の子孫のほうが比較的見つけやすく、彼らから宗家まで系譜関係を遡っての追跡調査は方法として有効である。

本研究では、士族の門中の大宗、大宗から分かれた小宗、屋取集落の門中の家々など、門中の系譜上で様々な位置と役割に当たる各層の系譜意識や祭祀を検証し、これによって士族系門中の系譜関係の把握や、各層の祖先観・門中観を明らかにした。加えて、転入してきた屋取集落の住民とその転入を受け入れた側のムラの共同の行事の事例として、中城村当間などの綱引き行事の調査も実施した。

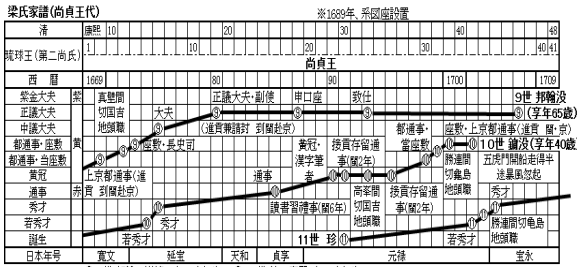
(2)「家譜」の分析とその成果の提供

琉球士族の家譜を一言で述べると、「一門ごとの男性の履歴書集」で、個々人の王府に対する貢献が記録されている。本研究では、家譜史料の読解の一環として、試験的に、図2のようなグラフ化を試みた。

このグラフの構成は、縦は誕生から出世の頂点である三司官までを示し、横は1マスが1年を示している(明・清の年号、琉球の王代、西暦、日本の年号を配置)。個々人のグラフが上下の位置取りで出世の傾向が現れ、グラフの角度の緩急が出世のはやさを示す。サンプルとして挙げた図2は尚貞王代の梁氏門中

(1669～1709年。梁氏宗家の9～11世)のものだが、家譜に載る元祖から琉球王府終焉までのグラフを作成し、まず一門ごとの全体的な傾向を明らかにした。同時代人を一目で比較できることもこのグラフの長所である。また、複数の門中の比較も可能となる。

なお、このグラフはそれぞれの子孫の門中団体に提供した。



[図2 琉球士族の出世グラフのサンプル]

(3)近世の琉球通事による英・仏への対応

上記の家譜の分析の成果の1つとして、19世紀の琉球の通事(通訳)たちが、琉球に停留した英国人・仏国人にいかに対処したかを、家譜史料から明らかにし、成果を歴史学のシンポジウムで報告した。こうした欧米列強への対応は国家史として議論されることが主であるため、外交の現場で実際に英仏人と日々付き合っただけの通事の記録を明らかにしたことは評価を受けた。

それに加え、上記のグラフを活用して、英仏の外交経験を、通事個人の人生的な位置づけること、代々の家業として位置づけることも果たすことができた。このテーマは今後も進めていく計画である。

(4)門中団体による資料刊行の事業

門中が今日、自身の資料を整理して編纂する目的は、家譜の記録をより読みやすい形で共有し、さらには次代に伝達するためである。何よりもまず漢文で書かれた琉球王国時代の家譜の内容を理解するために、その翻訳・解説を含む資料集が門中の事業として刊行されている。また、祖先と自分たち子孫の系譜関係を示すため、王府時代以来の系図と当代に至る最新の系図がつけられる。それらは門中の祖先像の整理と共有であり、祖先と子孫かつ子孫同士の史縁関係を目に見える形で提示し確認する作業である。

こうして、書き残されてきたものを改めて書き残すという、今日において過去の歴史と今後を見据えた行為が可能になった。このとき、家譜・系図はただ複製されるだけでなく、いかにして内容をわかりやすく表現できるかという工夫が凝らされる。家譜資料の翻訳や刊行は、より具体的な「祖先像」を明らかにするために積み重ねている。

ただし、門中成員の全員が完成した資料の内容を把握しているとはとても言えない。各戸に所有された資料について、個人がどのように見ており、手にとって読まれる機会は

どのような時にどんな必要に駆られてかという問いについては課題としたい。

(5)門中団体と法人制度の改正

沖縄県下の門中のうち、いくつかは民法の旧法人制度で法人(社団法人、権利能力なき社団)となっていた。それが今回の制度改正に際し、改めて新制度下で公益社団法人になるか一般社団法人になるかの決断を迫られた。ほかに、これを機に従来に比べて申請が通りやすくなった一般社団法人格の取得を検討した門中団体もあった。

門中というもとは親族の団体を法人とするに当たって、定款の作成、結成の目的・事業の表明、会員資格の確定、年次の会計報告など、ともすれば親戚付き合いにはそぐわない対応も余儀なくされ、司法書士に相談しながら慣れない作業に当たっていた。例えば、旧来の門中会の会則では目的としてまず挙げられていた「先祖」について、法人の定款では事業の1項目に移り、さらに「霊」という表現も削られた。代わりに、定款の目的では「共有財産」についてより明確に位置づけられ、また事業も具体的に項目化された。ある門中団体は、会員を門中成員の外に拡張し公益社団法人となることを選択し、一方、ある団体は会員の拡大を必要とは考えず今回は一般社団法人を選択した。

琉球王国時代以来の門中の団体が歴史・時間をこえて、今日の状況に応じて結集する実態は、例えば血縁・系譜関係の事実を会員規定に置き換えつつ、祖先たちの履歴などの共通の歴史の共有によって結集している。そこから見出されるのは、祖先と子孫かつ子孫同士の史縁関係である。

さらに、期待される「子孫像」を体現するのも門中団体の責務の1つで、会員のために資産管理をはじめ多くの事業を行っている。中でも、清明の墓参りや墓所の修復・整備など、沖縄においてこれまで門中が果たしてきた祖先に対する子孫の義務を、引き続き門中団体が執り行うための方策も模索され続けていることが確認できた。

(6)孔子廟(久米至聖廟)移転の調査

年月日	事項
2012.9.28	移転前最後の「釋奠」
2013.6.15	10時～「久米至聖廟遷座行列」
同	10時40分～「遷座の儀」
同	15時～「久米至聖廟新築落成式」
2013.9.28	移転後最初の「釋奠」

[年表2 孔子廟の遷座の過程]

孔子廟が那覇市若狭から同市久米への「回歸」の過程とその儀礼的行事について、計画の準備段階から継続的に調査した。移転(遷座)当日は、琉装をまとった久米崇聖会理事らが孔子や四賢子の神位を運ぶための遷座行列が組まれ、「孔子神輿」を中心に、論語の旗や太鼓、(那覇大綱挽きの際の)旗頭などが

同道して、旧孔子廟から久米の新孔子廟まで行進した。その構成は中国風というよりも、むしろ沖縄県下の行事でよく見られる「道ジュネー」そのものだった。同様に、遷座の儀では遷座・上香のあとに、沖縄の空手演武と旗頭が披露、落成式ではかぎやで風が披露されるなど、沖縄的な盛り上がりで花が添えられた。

移転前年・当年の釋奠(孔子祭)も調査した。大きな違いの1つは、孔子の父ら先人を祀った「啓聖祠」への祭祀が移転を機に69年ぶりに復活したことである。

(7) 『沖縄県「註記調書」集』活用の促進

国土地理院に保管されていた、大正時代の陸軍陸地測量部による、当時の沖縄の区町村ごとの註記調書を整理した。同調書には、大正時代における字および屋取集落の人口・戸数、地名の読み仮名などが掲載されており、近現代沖縄の集落研究の基礎資料となるものである。

2012年度に中間報告書としてその資料集を刊行した。沖縄の研究者や沖縄県立図書館、沖縄県立博物館、那覇市歴史博物館などに提供した。また、国土地理院地名情報課などの協力を得て、その画像スキャンデータの活用も沖縄県関係者に対して進めている。

引用文献

田名真之 2000「琉球家譜の成立と門中」『歴史学研究』743
比嘉政夫 1979「家譜からみた門中(一)『姓』と婚姻」『琉球大学法文学部紀要社会学篇』21

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

武井基晃「葬送の変化と祖先祭祀行事の自動車社会化 沖縄本島中南部の事例」、『国立歴史民俗博物館研究報告』191号、査読有、2015年2月、315~348頁。

武井基晃「系図と子孫 琉球王府士族の家譜の今日における意義」、『日本民俗学』275号、査読有、2013年8月、14~34頁。

武井基晃「軍用地返還後の土地利用と暮らし 西原飛行場一帯の原状と現状」、『沖縄民俗研究』31号、査読有、2013年3月、1~18頁。

武井基晃「祭祀を続けるために 沖縄の祖先祭祀における代行者と禁忌の容認」、『現代民俗学研究』第4号、査読有、2012年5月、9~24頁。

武井基晃「系図をつなぐ 屋取集落の士族系門中による系図作成の実例」、『沖縄文化研究』第38号、査読有、2012年3月、65~105頁。

〔学会発表〕(計7件)

武井基晃「琉球家譜に見る通事の人生と英・仏」、『筑波大学人文・文化学群シンポジウム「グローバル・ヒストリーと「異文化理解」」2014年10月26日、筑波大学(茨城県つくば市)。

武井基晃「関心の共有 調査対象者と史資料を読む調査」、『日本民俗学会第66回年会、2014年10月12日、岩手県立大学(岩手県滝沢市)。

武井基晃「琉球王府「通事」の異國への対応 子孫による先祖の履歴の評価」、『筑波大学人文・文化学群シンポジウム「グローバル・ヒストリーとしての「長期の19世紀」

グローバル化のなかの東アジア世界と日本の歴史的基盤」、『2014年1月12日、筑波大学(茨城県つくば市)。

武井基晃「家譜を読む子孫たち 琉球王府士族の門中」、『日本民俗学会第865回談話会「民俗研究は文字文化をどう扱うか」2012年11月11日、成城大学(東京都世田谷区)。

武井基晃「新「公益法人」制度と門中」、『日本民俗学会第64回年会、2012年10月7日、東京学芸大学(東京都小金井市)。

武井基晃「門中の位牌継承と女性 大宗家の現実」、『復帰40周年沖縄国際シンポジウム、2012年3月30日、早稲田大学(東京都新宿区)。

武井基晃「「女元祖」の位牌 沖縄の位牌祭祀における禁忌の受容」、『日本民俗学会第63回年会、2011年10月2日、滋賀県立大学(滋賀県彦根市)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武井 基晃 (TAKEI, Motoaki)
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：00566359